

中野重治全集

第四卷

筑摩書房版

中野重治全集第四卷

昭和三十五年一月十日 発行

定価 四二〇円

著 者 中 野 重 治

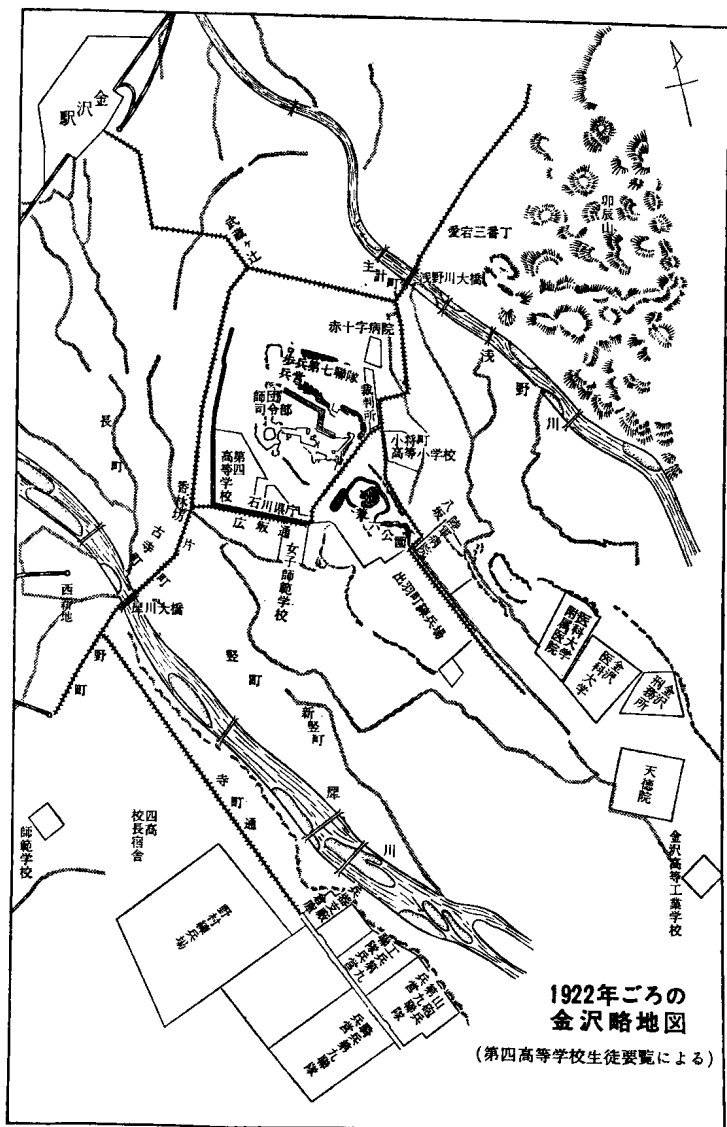
発行者 古 田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

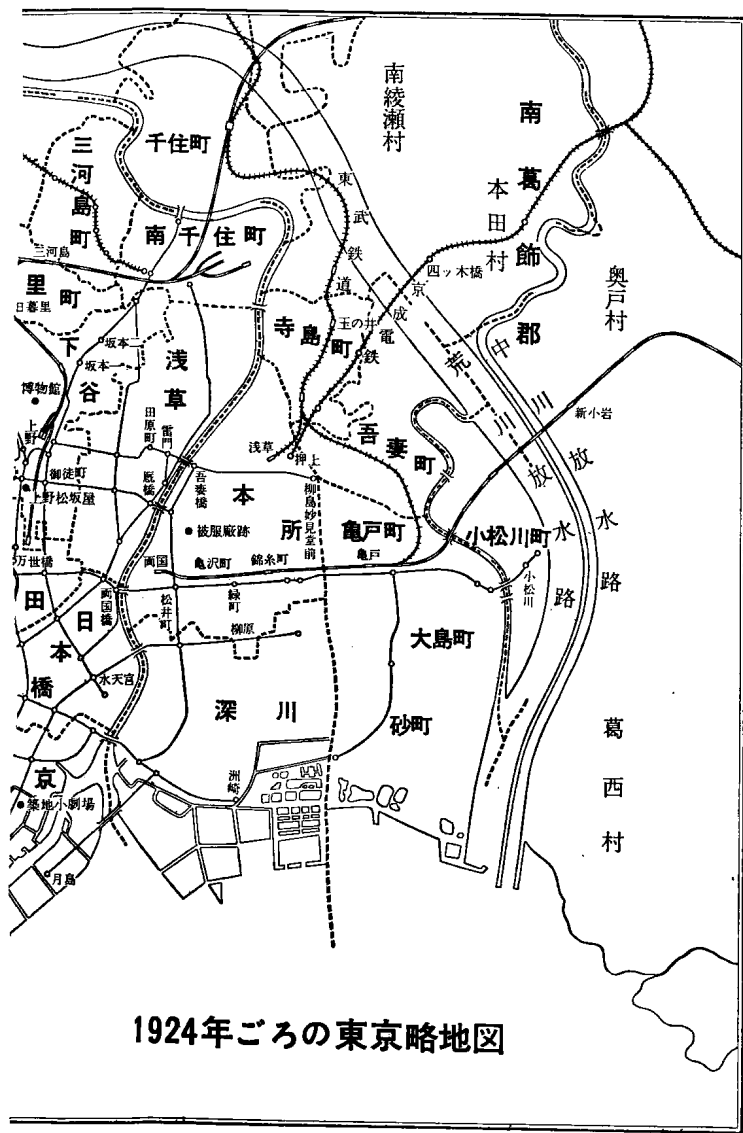
印刷者 勝 畑 四 郎
東京都三鷹市上連雀九九〇

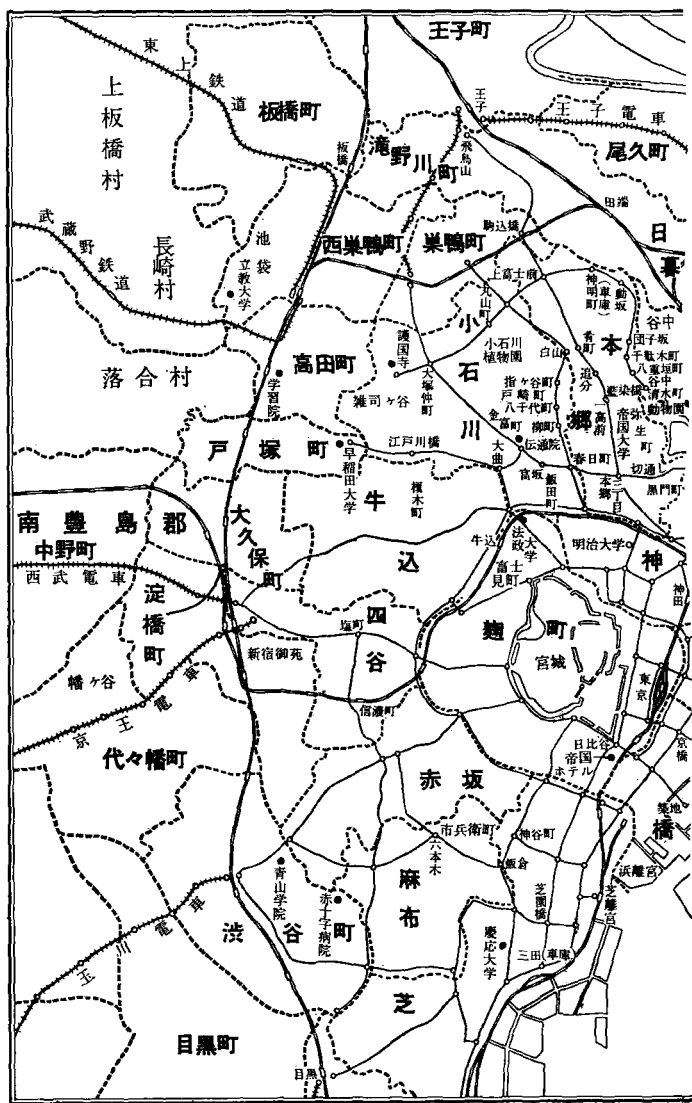
発 行 所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八
印刷 株式会社三省堂
製本 株式会社高陽堂

© 1960, Shigeharu Nakano (Printed in Japan)







目次

歌のわかれ	三
街あるき	一二
むらぎも	一五
解題 (中西浩)	四七
解説 (平野謙)	四七

中野重治全集 第四卷

歌のわかれ

鰯

片口安吉はおそい朝飯を食つてしまうと「さて今日はどうしようかな？」と考えた。目の前にあるいま食つたばかりの皿や茶碗の始末をすることがいつもにも増しておつくうに思われた。

安田がいつしよにいたうちはそれほどでもなかつたが、彼が長町の仏具師の二階へ引越して行つてからはいつそう自炊ということがいやになつていた。時には彼も朝はやく起きていそいそと朝飯をつくることがあつた。しかしそれを食つてしまうと、醬油の残つた漬物の小皿とか、内側に味噌滓の線のついた味噌汁のアルミニウム鍋とかいうものが、何ともいえぬわびしいものに眺められた。そうして、もとの部屋に一人で自炊していた松山が、ときどき安吉をひつぱつてきて二人で飯を食つた気持ちに心から同情できるのであつた。

金沢という町は片口安吉にとつて一種不可思議な町だつた。犀川と浅野川という二つの川がほとんど

平行に流れていて、ふたつの川の両方の外側にそれぞれ丘があり、ふたつの川の間にもう一つの丘があり、街全体は、ふたつの川と三つの丘にまたがってぼんやりと眠っている態であつた。そうして、街の東西南北にたくさんのお寺がかたまつていて、町の名にも寺町とか古寺町とかいうのがあつた。町の中央に名高い兼六公園という公園があり——つまりこの公園は川にはさまれた丘陵に拠つていたのであつた。——それにつづいて練兵場と衛戍病院とがあり、衛戍病院わきの急な坂をおりて行くところと山とのなかへはいつたような谷間の細路になり、この細路の両側はいろいろな宗派のお寺の軒つづきになつていた。

両側にある寺はわりに大きいものだつたが、そのつき当りの、これも谷川ともいうべき小川にかかつた石橋を前にひかえた寺だけはひどくみすばらしい小寺であつた。

谷間になつてゐるうえに寺々の杉の太木などが並んでゐるため、この小さな区域は大体が暗くて湿つぽかつたが、つき当りの小寺は谷の行止まりに位置してゐて、うしろの孟宗藪がそのまま山になつてゐるためとりわけて暗く、その庫裡くらの北向きの二階部屋は夏冬とおして日光というものがはいらぬのであつた。

この部屋を最初にみつけてはいつたのは松山内蔵太であつた。内蔵太はからだの大きなまじめな生徒であつた。おとなしい勉強家だつたが、氣質のうちのある強いものが内側へくすぶりこんでゐるようなところがあつて、自分でそれに堪えられなくなると雪の積つた街を草履わらじばきで歩いたりするらしかつた。寺の家族は住職と細君と十歳ぐらいの娘と六つぐらいの息子とであつた。細君には後妻らしいところがあり、二人の子供にも連れ子ではないかと思われるふしがあつた。夜おそく陰気な夫婦喧嘩の音が二

階へ洩れてくることがあり、その陰気さのなかには、妻にたいする住職の貧とからみ合つた嫉妬の念がこもっている感じであつた。

二階の部屋にいても夜つびてぼちやんぼちやんという水の音がきこえていた。井戸も水道もないこの寺ではいまだに山水を使つていて、うしろの孟宗山から樋を伝わつてきた水が年中台所の中央の大きな井戸側のなかへしたたりたまつていた。

まわりの寺々にくらべて檀家というものなども少ないらしく、寺の格も低く、二人の子どもよその子供と遊ばずに二人きりでころころ遊んでいるところなど、何から何まで貧乏たらしい寺の様子だつたが、そういうことすべては、内蔵太がすこし離れた町通りの洋服屋の裏二階へ越して行つたあとも少しも変らなかつた。

こういう寺のありさまは、松山のすぐあとへ越してきた片口と安田との若い二人にも何としても樂しめぬものであつた。裏の藪から筍を掘つてきて筍飯をつくつたり、芹を摘んできてひたしものをつくつて食つたりしたあげくには、二人で町の蕎麦屋へ出かけてたらふくやす酒でも飲まねばおさまらぬのがきまりであつた。

片口も安田も豊かでない学生であつた。高等学校の生徒である以上分相応なものではあつたが、酒を飲むかわりには陽の射さぬ寺の二階で自炊をせねばならぬ程度であつた。そうして、二人の自炊生活も安田の恋物語の終るとともに片口一人のものとなつた。

春の終り頃のある日、その日安田は学校を休み、久しぶりで教室へ出た片口が寺の二階へ帰つてくると、寝ころんでバットをふかしていた安田が物憂そうに彼のほうへ頭をあげた。生来快活で、ごく淡泊

な意味で豪傑風なところのある安田には、こういう物憂げな風情は似ても似つかぬものであつた。

「今日ね、ここへメーチヘンが来るんだ。」

「ふうん……」といつて片口も何となくお茶などを飲んだ。

「つまり君を訪ねてくるんだね？」

「そうなんだ。」

「つまり君のリーベなのか？」

「そういうんじゃないんだがね……」

安田が眩しうにしていればいるほど片口は何とかいわねば安田に悪いやうなぐあいであつた。

「ごめん下さい。」という細い声がちようどそのとき下できこえて、寺の細君が「はい。」と答えるのがきこえたのといつしよに安田がとび立つようにしてつつ立つた。そして片口のほうへちらりと弱気な眼つきを投げてとんとんと階段をおりて行つた。

「や、いらつしやい。」

今度あがつてきた安田のうしろから色の浅黒い娘が現われた時、片口は心から歓迎したい気持ちで声をかけた。娘はもじもじして黙つたまま安田にとり片口にとりつかずお辞儀をした。

「おれ、ちよつと出てくるからね。」

何とかして娘を歓迎したく、また気持ちをらくにさせてやりたかつたが、どうにも術がないので片口はそういつて外へ出た。そうして公園のなかにある県立の図書館へ行つて、そろそろ学期試験の勉強を始めている学生たちの頭へ軽蔑するような視線を投げ、威張つたような顔つきで特別室へ通り、このま

え見残した鐸の写真のいつぱいはいつたイギリス本を五六冊借り出してどつかりと椅子に腰かけた。

これが安田の恋物語の——片口に知られたかぎりでの発端だったが、その後安田からは格別の報告もなく、そのうち一と月もたつた頃には物語の終末を聞くていたらくであつた。

偶然同じようにして、安田が学校を休み、片口が久しぶりで学校から帰つてきたある日、この前と同じように寝ころんでバットをくわえていた安田が片口を見るなり待ちかまえていたように話を持ちかけた。

「片口、いつかのメーチヘンね、おれやめようと思うんだ。」

「やめようと思うつて、どうしたんだ？」

「向うがあんまりまじめで苦しいんだよ。おれ、出てくるからね。練兵場で待つてるんだ。」

その晩安田はおそくなつてひどく酔っぱらつて帰つてきた。

その後一度か二度、片口も安田も留守のところへ娘が訪ねてきたらしいことを細君が安田にいつていたが、それも安田には堪えられぬらしく、ひどく雨の降る日に仏具師のところへ引越して行つてしまつた。そしてそれ以来片口の自炊生活がいつそう陰気くさいものになつていた。

「どうしようかな？ どうしようかな？ どうしようかな？」

口のなかでくりかえしながら彼は絵の具箱を机のわきから引き出した。蓋をあけて見るとまだ絵の具はあつた。彼は汚れたままになつてゐるパレットの上を拭いたり擦つたりして、できそこないの自画像のカンヴァスをさげて「ちよつと出てきます。」と細君に挨拶して玄関を出て行つた。

彼はそのまま右隣の寺の庭を横切つて、孟宗藪つづきの山腹を斜めに登つて行つた。そこにも寺が

あり街のはずれの部分があつた。街のはずれといつても都会の場末といった感じではなく、遊んでいる子供も働いている女などもほとんどまつたく百姓風であつた。

石段だの木根つ子だのを踏んで丘陵地の上へあがりきるとほんとうに山の上へ出たようにあたりが明るかつた。そこいらは、彼の部屋から十町とは離れていないのに彼には初めてであつた。片口安吉は安田徳蔵や松山内蔵太や舟木篤などと同じく学校を一年落第していたから、足かけ四年のあいだ町の隅隅をほつつき歩いていただけでもこの方面は足を入れていなかつた。

眼の前一面に畑がつづき、右手には南のほうへ伸びている街の屋並が頭だけで覗き、その端に見える高い建物は医科大学と高等工業学校とにちがひなく、この全体が弱い盛り上りをなして、その向うへ低い山脈の頂上の部分が顔を覗けている光景はいかにも丘陵地らしい美しさであつた。

彼は時に立ちどまつてうしろをふりかえり、そのつど、丘、街、川、それに反対側の丘陵地をふくめた風景が「ウェルテル」のなかのある場面に似通っているなどと考へて歩いて行つた。そうしてすっかり街を遠ざかつたある地点へきた時——ある地点というよりほかはなかつた。そこがどの地籍に属するか彼にはいかにも見当がつかなくなつた。——彼ははつとして立ちどまるといきなり眼の前の畑へずかずかと踏みこんで行つた。

畑の端に榛の木が六七本並んで立ち、その向うが傾斜になつてゐるらしく、赤煉瓦の古風な建物の頭がそのわきから覗けていた。彼は畑を二つ三つまつすぐに踏みこした。建物の姿がすっかりあらわれてきた。思いもかけずそこに監獄が建つていたのであつた。

太陽は頭の上を通りこしていた。太陽のあたりの空は錫色に輝いていた。その下で草も木もまだ青々

としていた。彼は赤い建物を画面の右半分以上に入れ、その次ぎに建物に沿うた桜並木を縦に入れて三脚に尻をおろした。

赤煉瓦独特の白い粉を吹いたような朱の色、桜並木の黒ずんだ緑とそれの植わった土手の草の柔らかい緑、左上隅の晴れた空、その下の村々と畑との横に重なった線、特に桜並木の影が土手の草を明暗に染めわけて、そのあやを絶えずちらちらさせているのが言い甲斐なく美しかった。

彼は、小学校と中学校とで学科として習った以外全然画というものを習ったことのない手つきで手を動かしていった。きたない自画像の顔はずんずん塗りつぶされた。彼はいつか京都で見た「草枯れし監獄の横」という画を思い出した。するとそのとき泊めてもらった自分と同じ姓の片口英男の家の二階の光景が思い出されてきた。

片口英男と片口安吉とは似ても似つかぬ同姓の二人であつた。英男のほうは小づくりで色白でやわらかく太つていた。安吉のほうは痩せて色が黒くていつも犬のようなとげとげしい眼を光らせていた。意識しないで生活を楽しむという風が英男にはあつた。安吉のほうは「気ざらい」ということを食つて生きているようであつた。精神的にも肉体的にも善良で動作ののろいのが英男の特徴であつた。

京都へついて最初の夕方、英男と英男の二人の妹と安吉とは、英男の家の天井の低い二階で新聞を読んだり無駄話をしたりしていた。そのとき英男のいちばん上の妹が階段の上へ顔を出して小声で呼んだ。「にいはん……」

それにつづいていつた言葉は安吉には聞き取れなかつた。彼は、ぱつと起ちあがつた英男がつんのめるようにして階段へ消えてゆくの見送つた。そして金沢へ帰つてから、それは家の前を往つたり来た

りしている英男の恋人を見つけた妹が、兄に同情してそつと知らせたのであつたと聞いてつくづく感心した。

「だつてあのとき君の妹はまだ階段にいたんだろう？　よくも突きとばさなかつたね。」

「それやいたさ。おれにもわからん。」

そういつて英男は悪気のない笑顔を見せた。

恋はのろまをすばやくす

安田徳藏また然り

されどおれには恋はなし

草枯れし監獄は高川高政

草のあおい監獄は片口……

そのとき安吉はうしろに人影が立つのを感じて振りむいた。その安吉の顔へ、あかい着物を着た四人が二三人ひとのよさそうな笑い顔を見せた。その二三人のうしろにもまだ何人かの囚人の姿が見えた。恰好からすれば彼らは耕耘作業に出ているのにちがひなかつた。するとここいらは監獄の畑なのだろう……

人が見ていることは安吉には気にならなかつた。彼は関根正二とか村山槐多とかいう人間の画を偶然みて画が描きたくなり、その後一人でそれも時たま描いているだけであり、『油絵の描き方』などとい